

特集ワイド

二階派で活動2年、自民入り目指す細野豪志氏 批判されても私は違う道 安保政策は一致、人間関係には苦慮

毎日新聞 2021年1月27日 東京夕刊



＝宮武祐希撮影

衆院解散・総選挙が視界に入る中、全国的に注目の選挙区がある。かつて民主党のプリンスといわれた細野豪志元環境相（49）の静岡5区だ。二階俊博幹事長（81）が領袖（りょうしゅう）を務める二階派・志帥会の「特別会員」として2019年2月から活動しているが、選挙では自民党現職と戦うことになる見通しだ。自民党入りを目指して約2年の細野氏、意外にス

ッキリとした顔である。

河野太郎行政改革担当相のコロナワクチン担当の兼務が決まった18日、細野氏が投稿したツイートには、日露戦争の故事が引かれていた。〈（河野氏の起用は）いい判断だと思う。皇国の興廃この一戦にあり〉。連合艦隊の東郷平八郎司令長官は旗艦「三笠」にあの有名なZ旗を掲げ、「皇国の興廃この一戦にあり。各員一層、奮励努力せよ」との意味を込め、ロシアのバルチック艦隊を迎え撃った。

よもや河野氏を東郷元帥になぞらえているわけではあるまいが、「皇国」の表現の可否はともあれ、細野氏がコロナ禍を国家存亡の機、ワクチン接種を「救国の大作戦」だと考えているのは推察できる。細野氏がこう語り出した。「最優先は地元の医療体制とワクチン接種、飲食店や観光の経営支援です。政治家なら、ここは国民と地元のために働くべし、ですよ。ワクチンの普及に向けては、自治体の業務が重要になってくる。要望を聞き、サポートします」

17年の衆院選前、細野氏は小池百合子氏が結党した希望の党に参加したが、同党は大失速し、自民党の勝利に終わる。同党消滅を経て誕生した新党「国民

主党」に細野氏は合流せず、現在も無所属のまま。自民党入りを目指し、二階派で政治活動を続ける。いまだ入党が果たせていないのは、自民党静岡県連などの反発が強いからなのだが、次期衆院選の結果次第では自民党入りとの観測もある。

とはいえ、巨大与党入りを目指す元野党の大物議員となれば、地元のみならず、世間の風当たりは相当強い。「スマートでカッコいいことをやっているとは思っていない。非常に厳しい批判があることも、十分承知している」と率直に語る。

それにしてもなぜ自民党なのか――。細野氏は伯父が自衛官で、親族には自衛隊関係者が多いという。選挙区には東富士演習場（御殿場市など）を抱え、以前から「現実的な外交・安全保障政策が重要」との考えが強かった。コロナ禍を日露戦争に見立てた発想は、そうした事情に由来しているのかもしれない。だが、野党時代には、安保法制反対を強く訴える共産党と良好な関係を築く必要があり、大きな声で持論を訴えることができないというジレンマを細野氏は抱えていた。

「現実的な安全保障の厳しさというものを、（10年の民主党政権時の）尖閣諸島での中国漁船衝突事件で訪中した時に、私なりに体験しました。現実的な安全保障を実現できないと、国民を幸せにできない、混乱に陥れる、それは国益に反する、と。もう、これについては確信がある。それをやるぐらいなら政治の世界からいなくなった方がいい。生業でやってるわけじゃないから。国のため、国民のためにやっているわけだから」

希望の党に参加したのは、そのジレンマを解消するためだった。「野党議員としての最後の勝負。退路を断っていたので、そもそも野党に戻るつもりはなかった」と言い、衆院選後は半年以上、政治家を辞めるかどうか悩んだという。「政治家を続けると決めた後は、安全保障という基本的なところの考え方が一致する自民党しか選択肢はなかった」とも。

自民党入りを目指すと公言して以来、細野氏は政策の柱に「現実的な外交・安全保障」を掲げる。「野党時代に比べ自由に発言できるようになったことは、精神衛生上は非常にいいですよ」と笑う。一方でこんな本音を漏らした。「私も政治家の前に人間だから、あんまり人に恨まれたりとか、そういう人生は生きたくない。個人の幸せだけを思えば、違う人生の方がよかったかもしれませんね」

実は細野氏、二階派以外の派閥に入会する気は全くなかったという。なぜ二階派なのか。「二階幹事長はかつて、静岡5区（中選挙区時代の静岡2区）選出の遠藤三郎元建設相の秘書を務めておられたので、その縁がありました」。二階氏が「来る者拒まず」の信条で派閥を率いていることに加え、細野氏を評価していた点も大きかったようだ。かつて二階氏はこう語ったことがある。「国会議員として当選7回のキャリアがあり、立派な素質をもっておられる」

二階派入りして約2年、それでも苦労は尽きない様子である。「（永田町の）人間関係でいうと、難しい面はある。やはり野党時代の人間関係は当然薄れる。自民党に関しても、二階派には大変よくしてもらっているが、全体で見ると、当然溶け込むのにはそれなりに時間がかかりますよね」と打ち明ける。

地元の支持者にも変化があった。「離れる人は離れていったが、『自民党に入るなら応援するよ』と言ってくださる方もいる。今、落ち着くところに落ち着いた感じですね」という。とはいえ、次期衆院選で自民党現職の吉川赳氏と議席を争う道を選んだことについて、自民党内に批判が多いのは事実だ。それでも細野氏は「心苦しい思いもあるし、我ながら厚かましいことをしているなとも思うが、最後は地元で皆さんに決めてもらいたい」と言い、選挙区をくら替えする考えはない。

コロナ禍の中、自民党への逆風が吹き荒れている。政府の対応が「後手」と批判されているのだ。報道各社の世論調査で菅義偉内閣の支持率は続落し、幹事長として菅政権を支える二階氏もまた首相らとの「ステーキ会食」などで風当たりが強まっている。次期衆院選に目を向けると、細野氏が7期連続当選してきた静岡5区には立憲民主党の新人、小野範和氏も出馬を予定し、自民分裂による「漁夫の利」を得る可能性がある。

政権選択選挙である衆院選が控える中、細野氏は「今は野党を論評する立場にない」と言葉を濁しつつも、こんな心境だそうだ。「政権交代の仕組み自体は、民主主義の仕組みとしてはいいことだと思うんですよ。だから、それを目指すという選択肢を否定する気持ちにはならない。私は違う道を選びましたが、そこはもう、何て言うかな、それぞれの道で頑張っていくっていうかね、そういうことだと思いますけどね」

私は初任地が静岡支局で、06～09年ごろに細野氏を何度も取材した。当時の細野氏は30代半ば。高身長で整った顔立ち、弁が立つこともあり、落下傘候

補でありながら地元人気はすさまじかった。忘れられない場面がある。06年ごろ、静岡県三島市の居酒屋で本人と記者数人との懇談会があった。すると、主婦らしき女性数人のグループが、芸能人を見かけたかのように黄色い声をあげながら細野氏に握手を求めてきた。まさに人気絶頂だった。

あれからおよそ15年。細野氏はアラフィフになり、白髪も目立ち始めた。スマートさだけでは物足りない。今後も注視していく。【浜中慎哉】

■人物略歴

細野豪志（ほその・ごうし）氏

1971年生まれ。京都大法学部卒。三和総合研究所（現・三菱UFJリサーチ&コンサルティング）研究員を経て2000年に衆院初当選。環境相、内閣府特命担当相（原発事故収束・再発防止）などを歴任。静岡5区。